

狩野山楽筆「車争い図屏風」(東京国立博物館)に関する一考察  
—「年中行事絵巻」との関係を中心に—

東京大学 野田 麻美

従来、狩野山楽筆「車争い図屏風」(東京国立博物館、以下東博本)は古典的な絵巻を学習して描かれたと推察され、滝精一氏が山楽を大和絵の復興者に位置付けた如く、東博本が古様な様式的特徴を有することは夙に重要な要素として認識されてきた。本発表では、東博本は「年中行事絵巻」を参照して描かれていることを指摘し、それを具体的に検討することで山楽の古典的な絵巻の学習成果をより明確にしたい。

東博本は、整然とした行列、葵の上と六条御息所の従者たちの乱闘、逃げ惑う庶民たちを描いた場面から成り、巧みな場面転換の手法が重要な特徴として注目される。この特徴は、「年中行事絵巻」の模本群のうち「春日詣」巻(鷹司家伝来系統)中の図像を再構成することによって生み出されていると指摘できる。また、乱闘場面の生き活きとした群集の表現や精細な庶民の描写などについても、「年中行事絵巻」の図像を参照している点に言及する。

山楽が図像的に広まっていない鷹司家伝来系統の「年中行事絵巻」を用いることが出来たのは東博本の所有者であった九条家と鷹司家の血縁関係があったためという事情を考慮すべきと思われる。東博本と「年中行事絵巻」との関係は直接的、密接で、他の古絵巻を利用した制作例と比べてもとりわけ深い。その背景には、山楽と、『源氏物語』の絵画化に精通していたと考えられる九条家の、先行する土佐光茂筆「車争い図屏風」(仁和寺、以下仁和寺本)への十分な理解があると言えよう。「車争い図」の舞台である賀茂祭を絵画化した「賀茂祭絵詞」には、文永11年の賀茂祭の行列描写に、賀茂祭が中断していた中世末頃の風俗を描きこむことで、往時の賀茂祭の姿を画面上に甦らせようとしたと思われる模本がある。仁和寺本はそのような特徴を源氏絵に取りいれていると考えられ、壮麗な行列に当世風俗を描きこんだ現実感の強い作品に仕立てられている。そうした特徴を継承する東博本は、「年中行事絵巻」を用いて『源氏物語』成立当初の賀茂祭の行列を想起させるとともに、当世風俗を描くことで慶長9年の九条忠栄と完子の婚礼行列とのダブル・イメージとして制作された可能性が強く、川本桂子氏の推論を一步進めることができよう。また、東博本は「年中行事絵巻」の祭礼表現を用いて源氏絵に風俗画的な要素を加えている点も見逃せない。行列と祭礼の喧騒との組み合わせ方や、慶長9年の実際の行事の絵画化であるなどの点で、東博本は狩野内膳筆「豊国祭礼図屏風」(豊国神社)と共通点を見出せる。つまり、東博本は祭礼図的な、また慶長期の狩野派の風俗画的な性格が強いと言える。源氏絵の伝統を良く継承しながらも、「年中行事絵巻」の祭礼表現を狩野派の風俗画的な表現として再構成している東博本の登場は、源氏絵、近世初期風俗画の展開を考察する上で非常に重要な意味を有している。以上の論点を通じて、東博本の史的位置付けについて考察してみたい。